

## ■カンタータ第187番<BWV187>

「すべてのもの汝を待ち望む」

1726年5月から9月にかけてテキストに採用した「ルードルシュタット詩華撰」からの1曲として、同年8月4日（三位一体節後第7日曜日）に初演された教会カンタータ。当日の福音書章句であるマルコ福音書第8章の、イエスがガリラヤで行った7つのパンから四千人を満たした奇跡をベースに、第1部にはこれに関連づけられる旧約詩篇による神讚美の音楽を置き、第2部は新約聖書の聖句に始まり、神の恵みへの省察を経て、最後にコラールで締めくくる。バッハ自身、このカンタータを自信作と見なしていたらしく、後年（1730年代後半）、小ミサ曲BWV235に冒頭合唱曲と3つのアリアを転用している。

第1曲（合唱ト短調 4/4）は、あたかもシンフォニアと見紛うような見事な器楽前奏により幕を開ける。活力に満ちた4度跳躍と16分音符によるモチーフが、「ふさわしい時に糧を与え給う」神を待ち望むような、期待に満ちた情景を描きだす。これに合唱も加わり、詩篇104篇27～28節の各行の言葉に応じて自在にテクニクを変化させながら、主なる神を高らかに讚美する。やがて、生氣溢れるテーマ（譜例⑦）に基づくフーガが展開されるが、これが最高潮に達したところで、あたかもソナタ形式を予見するかのように、冒頭の器楽前奏に合唱が組み込まれ再現されて終わる。20世紀の高名なバッハ研究家フリードリヒ・スメントはこの合唱曲を、「芸術的価値においてはト短調ミサ曲のクレドとグローリアの頂点にもひけをとらない」と評している。なお、この曲にしばしば出現する、天から地上をくまなく照らす光明のように奏でられる長い音価の動機（譜例⑧）は、第4曲にも再現されるので、ぜひ記憶にとどめておいていただきたい。

神の権能をさまざまに例示するバスのレチタティーヴォ（第2曲）に続き、第3曲のアリアでは、オーボエを含む弦の伴奏を従え、アルトが詩篇65篇の神による祝福を讃える（変口長調 3/8）。小節線を越えて多用されるシンクペーションは、あたかも人智を超える神の恵みを表すように奏でられ、また、3小節単位と4

小節単位の拍節法の混合は、神の恩恵にあずかる人間の謙譲と畏怖をも活写するようである。このようにして、バッハは一見舞曲風の軽やかなこのアリアに、実にさまざまな表象を盛り込んだ。

第2部は、バスがマタイ福音書第6章のキリストの言葉を威厳をもって歌うアリアで開始される（第4曲ト短調 2/2）。ヴァイオリンと通奏低音が、長短短のリズムとともに第1曲にあった譜例⑧の動機を幾度も再現し、旧約聖書に述べられる恵みの神とキリストとの同格性を強く聴くものに意識させる。これに続く第5曲のアリアは、アダージョの指定をもった美しいオーボエのオブリガートを伴い、ソプラノが神の恵みを可憐に歌う（変ホ長調 4/4 -3/8 -4/4）。優美で繊細な装飾音型は、地上のあらゆる生命を育む神の慈愛を表すものであろう。一方、通奏低音は付点音符の動機を響かせ、神の権能を感知させる。中間部ではウン・ポコ・アレグロに速度を速め、オーボエの分散和音に導かれながら、軽やかな足取りで憂いを拭い去り、神への信頼を晴れやかに歌う。冒頭の魅惑的な器楽前奏を再現して終わるこのアリアは、バッハを愛するすべての者にとってかけがえない宝である。第6曲のレチタティーヴォでも、前曲に引き続きソプラノが、弦の和声に乗せて主への帰依を語る。中間部では、このカンタータで唯一の、弱い心への内省を痛切な和声を伴って吐露するものの、やがて変口長調の明るい響きとともに、主の御業に思いを馳せつつ次曲を呼び出す。

最後は例によって四声体のコラール合唱が置かれる（ト短調 3/4）。フォーゲル作の食卓用讚美歌「われら心より歌わん」第4節と第6節が、神への感謝を3拍子のおおらかなリズムにのせて唱和され、この比類ないカンタータを大きく締めくくるのである。

### 【カンターター口コラム】

何といたってもこのカンタータは、大規模な冒頭合唱曲について触れないわけにはいきません。創作の絶頂期にあったバッハの姿をとどめる楽曲として、オルガン用の幻想曲とフーガト短調BWV542を想起させるものがあります。BWV542のフーガが、1720年、バッハがハンブルクのヤーコビ教会のオルガニストを志願の際

に、試験に列席していたオルガンの大家ヤン・アダムス・ラインケン（1632～1722）に敬意を表して、彼の故郷ネーデルランドの民謡を基にしたテーマで創作されたことは有名ですが、実は、第187番の冒頭合唱曲の中間に現れるフーガも、ある先人へのオマージュとして作られたのでは、と解説子は想像します。その先人ディートリヒ・ブクステフーデ（1637～1707）の音楽を聴くため、20歳のバッハがアルンシュタットからリュベックまで旅をし、許可された滞在期間を大幅に延長してまでその音楽に触れ魅了されたことは、つとに知られていますが、このブクステフーデのオルガンのための前奏曲とフーガBuxWV163にでてくるフーガのテーマ（譜例⑨）が、冒頭の同音反復といい、その後の軽快なコロラトゥーラといい、非常によく似ているのです。ただ単に主題が似ているだけなら、類例は枚挙にいとまがありませんが、さらに注目すべきは、バッハがその音楽をつけた歌詞と展開の仕方にあります。このフーガに付けられた歌詞は「貴方は与え給え、よって人びとは集う」で、フーガのテーマは合唱により14回、つまりバッハを象徴する回数提示されます。しかも、最初と最後はバッハその人の声域であるバスによってうたわれるのです。このようにしてみると、若いころからブクステフーデ（バッハにとっての「貴方」）の音楽を模範として学び、自らの音楽を築き上げてきた道程と先人への感謝が、このカンタータのなかのフーガに籠められているように思われてならないのです。もとより、これは解説子の勝手な夢に過ぎませんが、バッハの音楽が単に純音楽としてのみならず、様々なイメージを喚起する奥深さと、それを探索する喜びを聴くものに与える一例としてご紹介いたしました。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

（付記）先のブクステフーデのフーガのテーマは、ヘンデルも彼のオラトリオ「メサイア」

（1742年初演）の中の合唱曲「彼はレビの子孫を清め」で用いています。ちなみに、ヘンデルも若いころに「ブクステフーデ詣で」をしたことが知られています。

譜例⑦



譜例⑧



譜例⑨

